
あり得ない感情の一考察

津神 八尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あり得ない感情の一考察

【Nコード】

N1323Q

【作者名】

津神 八尋

【あらすじ】

所詮、恋愛なんて絵空事。自分には関係のないと思って生きる大学生、浜口由利19歳。そんな彼女にまわりつくのは、それまでほとんど接点のなかったはずの同級生、軽くて手の早いと評判の同郷出身橋本俊介。可愛い毒舌家の友人や、郷里の家族を巻き込んで由利の思ってもみなかったキャンパスライフが始まります。新連載です。よろしくお願いいたします。

初めの考察（前書き）

新連載です。

女の子からの完全一人称で勧めて参ります。
どうぞよろしくお願いいたします。

初めの考察

大概な場合、

恋などと言うものは、所詮絵空事。

小説や漫画の中にあるからこそ綺麗でもあり、美しくもあるのであつて、現実のその世界をみれば、どうしたってそれほどまでにドラマチックな事は起こらないと妙に達観してしまったのは何時の頃からだったのか。

他人様の恋愛沙汰には興味がない訳ではないけれど、自分自身を鑑みて、恋愛なんぞ、どうしたって出来はしないと思っていた。

昔から、「『変』は美德だ！」などと言う妙な信念を持つ父親と、我が家一の常識人で有りながら、「あたしに青春なんてなかったよ」と笑いながらけろつとしている様な母親との間の育っていれば、恋愛に対して、妙なあこがれなど持つ環境に無かったからかもしれないが。

結婚するなら見合い婚。

お互いの事がちゃんと形になってわかっていた方が、ほら、こんなにも安心。

燃え上がるような恋などいらない。

信頼と尊敬があればいい。

その中でゆつくりと、穏やかな愛情が育っていけばそれで良いと思っていた。

それこそが自分にふさわしい人生だと信じていた。

その一 由利と俊介

「ゆりり！」

まだ、風寒い、真冬の二月の大学構内。

「ゆりり。ねえ、ゆりってば！」

何か聞こえるような気もするが。

妙に甘ったれた口調で、その癖耳に変に響く低音ボイス。――
良い声だなんて思っ
てないぞ絶対に。

「ゆり！ ゆりり！」

聞こえない、聞こえない。

あたしにこの声は聞こえない。

「ゆりり！ ねえ、ゆりり！ ゆりゆりゆり由利」

「……いい加減にしろ！」

「あ！ やっぱり聞こえてんじゃない！ ひっどいな、無視して
い
く
ん
な
て」

出来るもんならしたかったてんだ、このボケ！

「何度も何度も連呼すんな！」

あたしの名前を安売りすんじゃないねえ！

「だって、一回で振り向いてくんなかったじゃん。だったら、何回

でも呼ばないと」

につこり笑ってあたしの前に立つ男。

染めた茶髪に、こげ茶の目。ストリート系とやらのファッションがやたらと似合うチャラ男君。

ぶつちやけ、顔は二枚目半、性格はしつかり三枚目半。

「用も無いのに、人の名前を連呼する必要があるのか、君には」

「用なら、ある！」

「…なに？」

「ノート、貸して！」

ガクツと体の力が抜け掛るのを、寸での所で食いとめる。

こんな奴の為に動揺するなんて、たとえ死んでもしてやるもんか！

「…講義中、何をしていたのかな？君は。確か、先週の講義の後も

同じセリフをこの口から聞いた様な気がするが？」

「ちゃんと出席はしてました！」

「当たり前だ！」

そんな事を聞いているんじゃない！

「ノートも、取ろうとしたんだよ」でもさ、あの教授の声ってば睡眠薬だと思わない？抑揚が余りにも俺のリズムにあっちゃってさ」

「…で？」

……なにがどうしたって？

「完全熟睡いたしました！ノート、貸してください！」

「このボケ！」

ベチン！

叩き倒す右手にも、もう容赦なんて欠片も無い。

「てめーの不始末はてめーでつけろ！ あたしに何の義理が有る！」

「だって、五分はがんばったんだよ」

「自慢にならん！」

ゲイン！

今度は固く握りしめた拳をお見舞いしてやる。

なんだって、こんな奴の知り合いになっちまう羽目になったのか…

「…で、応用物理だけで、良いのか？」

「あ… あゝ出来れば、電気工学も…」

溜息と共に、背負ったリュックから目的のノートを二冊取りだす。

「何時も通り、二日で返せ。コピーは不可。他人への譲渡も厳禁。破った場合は二度と貸さん。…いいな？」

コクン…と、小さくうなずいた後…

「ありがとう！！ やっぱり由利だよ！！ もう、めちゃくちゃ愛してる！」

「…最後の一言はいらん」

「えゝなんで？」

—— 誰にでも言ってる、心のこもってない言葉など、誰が欲しいと思うのか。

「あ、やばい。時間！」

「今日は、誰だ？」

「え」と、文学部の紗希子姫。一か月口説きまくった成果だよ」

「はいはい… わかつてるな？ 浮かれまくって約条なんぞ違った時は…」

コクコクコク…

一瞬真っ青になって、思いっきり頸を縦に振りやがる。
ふん！ わかつてんなら、それでいい。

「…ゆり…怖い…」

「そう思ってたんなら近付くな」

「ええ」 せつかくの、たった二人の同郷なのに」

…好きで、そうなっちまったと思ってんのか、バカ野郎。

「うわっち！マジ、やばい！ 由利、ごめん！サンキュウな！」

はいはい… ひらひらと手を振るあたしなんかもうその眼中に入れる事も無く、門の外へすっ飛んで行く奴を、あえて目の中に入れな
い様に踵を返す。

「ゆり！」

その途端、掛けられた声に一瞬強張る。

見返した先に居たのは、さっき目の前に居たのとは似ても似つかぬ
ほっそりとした小柄な人影で。

「…何だ、美咲か…」

「まゝた、橋本君？ 今日の略奪品は？」

「応用物理と電気工学のノート」

「……つくづく、由利ってばお人よし。あんなのほっとけばいいのよ、ほっとけば！」

あたしの代わりの様に怒ってくれる美咲に、なんともいえない苦笑を返すしかない。

篠原美咲。

あたしの数少ない学友様。

真つ黒な重たい髪をただめんどくさいから後ろで束ねただけのあたしとは違い、少し癖つ毛のある明るい茶色のショート。はつきりとした顔立ちは綺麗と言うより、キュートとでも言ってやりたいほどの雰囲気。飾り気のないセーターにジーンズ、ダッフルのコートと言う組み合わせは、けっして華美では無いのに、その仕草や表情が、同性のあたしから見ても、ハツとするほど可愛い。

その外見に惹かれて男ばかりのこの学部で、毎日と言っていいほど声を掛けられているみたいだが、さっぱりなびく様子は無い。むしろ、その見かけを裏切る毒舌ぶりに、バツサリとぶった切られた哀れな男どもは既に軽くふたケタ以上——あくまで、あたしが知っている範囲でしかないが。

「由利と橋本くんって同郷だっけ？」

「そう。考えたくないけど、中学高校と、クラスも同じ腐れ縁」

「それでかね」 由利が、橋本君に甘いのって……

「甘やかしてるつもりはないが……」

「うわっ！ 無自覚だと尚更悪い。甘やかしも大概にしとかないと、付けあがっちゃうタイプよ、あーゆーのは」

ただ一人同郷の、あたしの学部と同級生。

茶髪の軽い、お調子者の二枚目半。

なのに、なんだって、あたしは奴があたしに関わる事を許してしまっているのだろう。

その二 美咲と由利

「で、そろそろ吐く気になった？」

帰り際、そのまま引つ張られて寄ったドトールで、お気に入りのブレンドをブラックのまま飲みながら美咲があたしをねめつける。

「…穏やかじゃないな… 何を吐かせる気なんだ？」

「しらはつくれんじやないの！ あんたと橋本の関係よ！」

ごふっ！

ごくつと一口、こっちはしっかり砂糖まで入れたアメリカンを口に入れようとしていた瞬間だから、思いっきり熱いままのコーヒーが喉を這う。

「あれ？どした？」

「…のど、焼いた…」

「あらら、お気の毒

—— そんなに動揺するあんたも珍

しいから、尚更これは聞いてみたくなるわね〜」

「~~~~~！！！」

コロコロコロ…

まるで鈴が転がる様に優雅に笑うふりをしているが、

「…目が笑ってない…」

「相変わらず、鋭い事。だから、あんたと付き合っのって好き」

—— これだから、敵わない…

コクリ…

手に持ったカップから、コーヒーが啜り込むことでほてりかけた顔を隠す。

「前から、不思議だったんだよね。なんで、あの橋本だけがあなたにそんな風に甘える事が許されるのか」

既に呼び捨てですかお嬢さん…
ににににに…

その顔にあたしが逆らえないの、すっかりわかってやってますよね、美咲さん！

そう、あたしは、こんな美咲に逆らえない。
ううん、違う。逆らいたくないって思ってる。

これほどまでに、あたしに近付いた人間は、両親以外では美咲が初めてだ。

あたしと美咲が通う工学部は、男女共有が叫ばれる様になってからでもほかの分野に比べ格段に女性の比率が低い。

数少ない女子同士は固まるか、独立独歩を歩むかのどちらかしかないように思う。少なくとも、高校時代、あたしのクラスはそうだった。

たった一つしかない理系専用のクラスの中で、女子生徒はあたしも入れてたったの五人。決して仲間外れにされた事は無かったが、こんなにも間近で喋り合う事も無かったように思う。

その最たる原因が、『恋愛』

どうしたってあたしには、その年齢の女の子に付き物の、『恋愛』の話題に付いて行くことだ出来なかったのだ。

『1組の、誰それ君が好き!』
『あたしは同じクラスのあの子!』

聞いている分には決して彼女らの話は楽しくない訳では無かったが、女子と言うものは、お互いにお互いのちょっとした秘密を分け合う事でその関係を成り立たせるようなところがある。

あたしは何時も聞くばかりで、その場に何か提供できる知識もましてや経験なんて、これっぽっちもありはしなかった。生々しい、実際の恋愛を目の当たりにするくらいなら、小説や漫画の世界に浸っている方がましだった。

三年間、他の四人とは当たり障りのない関係は続けて来れたように思う――卒業の時、一緒に写真を取ろうとも思わないくらい。

だから、びっくりした。

美咲に出会った事に。

何時の間にか、あたしの近くに何の違和感も無く美咲が居た事に。

あたしと美咲は信じられないぐらいの短期間のうちに友人としての関係を確立していた。

思いのほかさっぱりとした美咲の気性によるのだろうが、ここまであたしの気持ちを逆なでせず、迎合せず、自分の意見をきっぱりと言つてのける癖に、傍に居るだけで気持ちを宥めて支えてくれる女の子をあたしは他に知らない。

べつたりと甘え、寄り掛かり、共倒れになりかねない女同士の付き合いの中で、お互いを尊重し、お互いのプライバシーに必要以上に踏み込まないで居られる友情は、無理を言つて地元を出てきたあたしにとって本当に心地の良いもので。

美咲に会えただけで、この大学に、そして、この学部に入れたことにあたしはいつも心の底から感謝している――たとえば、おまけの様に、あいつの存在が、付いてきていたとしても。

「…で、なんで？」

「は？」

「由利、質問に応えてない。なんで、橋本だけにそんなに甘いんだよ」

「…だから、自覚は無いと…」

「自覚なしの甘やかしなんて、かえって絶対許せない！ 却下よ却下！ 今後一切のノートの貸し借り禁止！」

「…美咲に迷惑をかけてないと思うが…」

「掛けてます！ 由利のノートの占有権はあたしのもよ！ あんなチャラチャラしたのに渡してたまるもんですか！」

「なんなんだ、それは…」

正直あたしたちの友情とも言える関係が長続きしてるのは、きつと一重に、この美咲の、あたしへの並はずれた好意に寄る所が大なのだろうと思うのだが。

「一度、聞いてみたかったんだがな、美咲…」

「なあゝに？」

「あたしの何処がそんなに良かったんだ？」

「全部！…」

――男だったら、さぞかし嬉しくて、舞い上がっちゃ
うような言葉だな…

残念ながら、あたしは女だ。

「だって、由利のノートってば、わかりやすいしまとめやすいし、字が綺麗だから読みやすいんだよね」

「…だから、ノートの話じゃなくて…」

「もっちゃん！ ぜんぶ、愛しちゃってるわよねー！」

—— だめだ、これは…

こんな事を言いながらも、美咲の言う『愛してる』があくまで友人としての範囲内だと解るくらいには付きあってるから、この軽口ももう平然とスルーしてやる。

「だから、今日こそ聞かせてよね。あんたと橋本の関係を」

あたしのノートがかかってるんだから。

…そんなモノ掛けないで欲しい…

「別に、関係も何もただの同級生で…」

「はいはい。中学高校と腐れ縁で同じクラスだった、それだけの同郷人だって言うんでしょ？」

それってば耳にタコ。

「—— あたしが聞きたいのは、その先なの。…いい？ あんた、自分で解ってるだろうけど、本当は例え同じクラスだからって、ホイホイ自分のノート貸したりなんかするタイプじゃない」

相変わらず、鋭い…

「だ〜から、変！ 絶対に変！」

「…え」と

「さあ、吐け！　今日は聞くまで帰らせないからね！」

「…だから、そんなに、勢い込んで聞かれるほどのモノは本当に無いんだが…」

——　　そう言えば、何時からだろう。

美咲に問い詰められて、ふと考える。

昔は違った。

少なくとも、高校の時まではあたしと奴はこんなに話したことも、ましてやノートの貸し借りなんてする様な間柄じゃなかったんだ。

「…何時から、ねえ…」

本当に、いつたい何時からだったのか…

『…浜口さん…だよな？』

大学の入学式で、声を掛けられた事をふと思い出す。

遡って行く記憶を後押しする様に、あたしはもう一口、コーヒーの苦さを味わった。

その二 美咲と由利（後書き）

遅々として更新が進みませんが… お気に入り登録を早速して下さい。ありがとうございました。どうか、気をながくして、お付き合ってください。宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1323q/>

あり得ない感情の一考察

2011年1月18日02時02分発行